

晩植田へ飛来するヒメトビウンカ第3回成虫

松井武彦・上田康郎*・稲生 稔
(茨城県農業試験場・*同下館病害虫防除所)

茨城県では昭和52年にヒメトビウンカの異常発生があり、その後イネ縞葉枯病が多発生し、とくに県西部において問題となっている。

その中で、かつてイネ縞葉枯病の回避策とされていた麦あとの晩植稲において、昭和54年以降激しい発病がみられている。これは晩植田へ7月上、中旬にヒメトビウンカ成虫の飛来があるためである。この成虫は、第2回成虫の移動が終わった後の時期であることから、一応第3回成虫と考え、飛来源と見られる早植田の第2回成虫、第2世代幼虫との関係を検討した。

調査方法

水田裏作の多い下館市小川、結城市宮崎、山王の3カ所で、5月上旬の早植田と、6月中旬の晩植田を選定(稚苗機械植)。ヒメトビウンカの密度と齢期について、イネ50株の見とりと、すくい取り10回振りを併用して調査をおこなった。調査期間は6月上旬から7月中、下旬までとし、調査間隔は約7日とした。

また、日本植物防疫協会の抗血清を使用して、6月19日から24日に第2回成虫を、7月14日から22日に第3回成虫を水田より採集し、保毒率を調査した。

結果及び考察

第1図に昭和54年から昭和57年までの早植田の第2回成虫、第2世代幼虫の推移と、晩植田の第3回成虫密度を示した。

昭和54、55年の調査では第3回成虫の飛来のピーク時に調査を打ち切った。このため傾向がはっきりしないが、晩植田への第3回成虫の飛来は、第2回成虫に比べ短期間におきるようである。

第3回成虫の飛来時期は、6月中旬から7月上旬の間の気温の影響がみられる。4年間の調査データから、帰帰直線

$$Y = 85.4527 - 0.107684X \quad (r = -0.903)$$

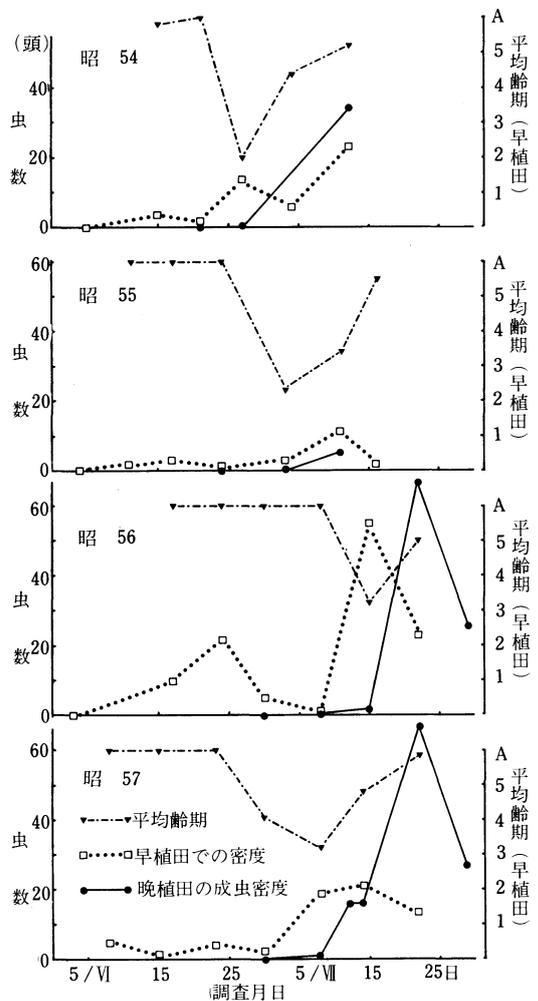
X; 6月11日～7月10日の日平均気温の累積値

Y; 第3回成虫飛来のピーク日

をえた。サンプル数が少ないこと、調査間隔が7日と

長いこと等の問題があるが、一応の目安となると考え、今後調査を重ね精度を高めてゆきたい。

早植田では、第2回成虫の飛来によって高かった平均齢期が、第2世代幼虫のふ化によって下がり、幼虫



第1図 早植田におけるヒメトビウンカの密度の齢構成の推移および晩植田への第3回成虫の飛来

の発育にともなって再び上昇する。この早植田の齢期の進展と、第3回成虫の飛び込み時期をみると、昭和57年は一致したが、他の年次では一致せず、昭和54, 56, 55年の順に差が大きかった。

また、早植田の密度の減少が、第3回成虫の移動によっておきると考えると、昭和56, 57年は一致したが、昭和54, 55年では早植、晩植田の密度の山がかさなり減少はみられなかった。

ネットトラップの調査結果を第1表に示した。下館のネットトラップでは、6月の第2回成虫の捕捉ができなかったが、7月の第3回成虫の捕捉量は多かった。これは調査地点の周辺に麦の作付が少なく、早植田が多いためと考えられる。

このネットトラップの第3回成虫の捕捉のピークに対し、晩植田の第3回成虫飛来のピークをみると、昭和57年は一致したが、他の年次では1半月から2半月早かった。むしろ、早植田の齢期の進展とネットトラップの捕捉の推移が一致する傾向がみられる。

このように、早植田の齢期、密度と、晩植田の第3回成虫密度、及び、ネットトラップの捕捉の推移がす

第1表 ネットトラップによるヒメトビウンカ成虫の捕捉(下館)

年	半 旬	6 月					7 月						
		1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
昭	54	1	1	2	5	0	0	0	18	61	103	31	13
々	55	0	0	0	0	0	0	0	0	2	15	9	24
々	56	0	2	0	0	2	1	0	1	11	71	97	225
々	57	0	0	0	0	0	0	0	0	55	103	156	88

第2表 水田におけるヒメトビウンカ成虫の保毒虫率

調査地点	早植田(第2回成虫)		晩植田(第3回成虫)	
	保毒虫率	調査虫数	保毒虫率	調査虫数
下館市小川	26.0%	46	18.2%	137
	(22.0	200) ¹⁾		
結城市宮崎	16.5	199	12.7	149
々山王	25.9	108	17.7	135

注) 1. ()内麦畑第1世代幼虫

べて一致したのは、昭和57年のみで、他の年次では時期的なずれがみられた。

晩植田へ飛来した第3回成虫の保毒虫率は、第2表に示すように、第2回成虫に比べ約20~30%減少していた。これは幼虫時代にウイルスの吸汁獲得が、あまりなかったためと思われる。